

映画「アリコとアンバイ (Aliko and Ambai)」から考える、ジェンダーの現代的課題

高橋, 麻奈
名古屋大学男女共同参画センター : 特任助教

<https://doi.org/10.15017/7343637>

出版情報 : ポリモルフィア. 5, pp.91-99, 2020-03-03. Office for the Promotion of Gender Equality, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



研究ノート

映画「アリコとアンバイ (Aliko and Ambai)」から考える、ジェンダーの現代的課題

高橋麻奈

名古屋大学男女共同参画センター 特任助教

1. はじめに

本研究の目的は、南太平洋メラネシア地域の島嶼国パプアニューギニアのジェンダー問題を扱った映画「アリコとアンバイ（原題：Aliko and Ambai）」日本初上映会およびその後の日本国内での反応を分析することにより、2国間の伝統・文化・社会背景を超えたジェンダー問題の固有性と共通性について考察することにある。

「アリコとアンバイ」は、パプアニューギニアの山岳地方である東ハイランド州の州都・ゴロカを舞台にした作品である（2017年制作：監督 Mark Eby, Diane Anton）。本作は、アリコ（Aliko）とアンバイ（Ambai）という二人の若い女性が様々な困難を乗り越えながら夢を追いかけていく人生を描いたストーリーであり、パプアニューギニア、ソロモン諸島、オーストラリア、グアムなどで国際映画祭にも出展されている。本作品では、パプアニューギニアの女性が向き合わなければならないジェンダーにおける「現代的課題」に着目しており、女性・女子たちの性暴力被害の現状と問題などの繊細な課題についても物語の中で描いている。

太平洋島嶼地域、特にメラネシアにおいては、女性の伝統的・社会的地位の低さやジェンダー役割が深刻な社会問題とされている。UNDP (2018) の Gender Inequality Index（ジェンダー不平等指標）によれば、パプアニューギニアは189か国中153位である。また、Fulu et al. (2013) によれば、パプアニューギニアの女性の約80%が男性パートナーの身体的・性的暴力を経験したことがあると指摘している。加えてUN Women (2018) は、パプアニューギニアで性暴力を経験している女性たちは、国内における社会的スティグマや、司法（法律扶助含む）および情報、警察などへのアクセスが制限されることによって、正当に救済が行われていないと指摘している。すなわち、女性たちの地位の低さとジェンダー間格差だけではなく、それに付随した問題が社会的な課題となっているのである。

		Gender Inequality Index		
HDI rank	Country	Value		Rank
		2017		2017
	VERY HIGH HUMAN DEVELOPMENT			
1	Norway	0.048		5
2	Switzerland	0.039		1
3	Australia	0.109		23
19	Japan	0.103		22
	LOW HUMAN DEVELOPMENT			
152	Solomon Islands	..		..
153	Papua New Guinea	0.741		159

図 1 : Gender Inequality Index (2018) (Source: UNDP (2018))

しかしその一方で、このような事実は日本国内ではあまり知られていない。このような状況において、本研究ではメラネシア地域の文化および社会、さらにジェンダー役割および伝統的社会における女性の社会的地位の低さについての理解促進を目的とし、2018年に「アリコとアンバイ」の国内初上映会を開催した。それを通じて、メラネシア地域、特にパプアニューギニアにおいて深く根付くジェンダー問題について知り、また国際社会がどのように問題に取り組んでいくべきなのかを考える機会を設けた。本研究の中心的な問いに、「映画「アリコとアンバイ」で描かれているジェンダー問題と二人の姿は、日本人にとってのカタルシスになりえるか？」を設定し、日本国内参加者から受けたフィードバックや議論、またパプアニューギニアにおけるジェンダー問題に対する日本国内の反応をみることによって2国間のジェンダー問題に関する意識を比較検討することにより、ジェンダー問題の固有性と共通性について考察する。

2.「アリコとアンバイ」が映し出すもの

2- 1.映画「アリコとアンバイ」とはどのような作品か

「アリコ (Aliko: Moslyn Moses)」は、農村部に両親と暮らし、地元の学校に通っていた。「教育は大切だ」という両親の教えもあり、勉学に励み成績は優秀、両親とともに幸せに暮らしていた。ある日、敵対する別部族の襲撃によって両親が殺害され、アリコはやむなく地元の村を離れることになる。勉強を続けるため、都市部に暮らす親戚のもとに身を寄せ、都市部の学校に転校するが、そこで一緒に暮らす叔母と従妹からの壮絶ないじめにあい、やがて学校に行くことも勉強を続けることもできなくなる。再び学校をやめ、故郷の村に戻されたアリコは、平和交渉の材料として、敵対する別部族の年配男性と強制結婚させられる。

アリコは、都市部で通っていた学校でアンバイに出会う。「アンバイ (Ambai: Venda Kakaso)」は、母親の再婚相手であり、アルコール依存症の義父に日常的に暴力を受けていた。ある日、義父にレイプされ、発覚を恐れた義父はアンバイを殺そう

とする。アンバイは学校をやめ、叔母のもとに身を寄せるが、義父はアンバイを追って探し回る。やがてアンバイは、アルコールやドラッグを使用するようになる。

アリコとアンバイのもとに、路上でタバコやビートルナッツ（檳榔、メラネシアで一般的な嗜好品）を売る青年「エイサン（Ethan: Paul Bebes）」が現れる。心優しいエイサンは、路上での暴動やデモの危険に巻き込まれないように二人を守ったり、義父から逃げるアンバイを匿うなど、様々な面で二人をサポートする。



図2: 映画「アリコとアンバイ」出演者（左から、アリコ（Moslyn Moses）、アンバイ（Venda Kakaso）、エイサン（Paul Bebes））（イメージ提供：マーク・エビィ監督）

2-2. 「アリコとアンバイ」はどのように制作されたのか

映画「アリコとアンバイ」は、マーク・エビィ監督およびダイアナ・アントン監督を中心として、ゴロカ大学にある社会・制作メディアセンター（Center for Social and Creative Media, The University of Goroka）のチームによって製作された作品である。この作品の製作は、パプアニューギニア現地のリソースを最大限活用し、かつ低予算

で行われた（Eby 2015: 3-5）。製作のユニークな点として、以下2点が指摘できる。

第一に、映画製作を通じて、パプアニューギニアのキャパシティ・ビルディングを行っていることである。主演の3人の俳優は、オーディションで選ばれたゴロカ大学の学生であるなど、ほとんどの出演者やクルーが、オーディションで選抜された地元の人々（素人）である。製作チームは、これらの人々に対して、映画シナリオワークショップや製作ワークショップなどの様々な研修を行い、「映画製作」の手法・技術をゴロカの人々に伝えていき、制作やメディアの全体的な能力向上を狙った（Eby 2015: 14-20）。

第二に、エスノグラフィの手法が用いられ、現地の人々に直接問いかけていくことで、パプアニューギニアにおける、非常に繊細かつ慎重に扱うべき課題を取り上げることに成功している。具体的には、性暴力に関するストーリー制作と、部族間紛争を扱った部分であり、これらは実際にワークショップの実施を通じて現地の人々に働きかけながら、コミュニティレベルで活動を行い、またコミュニティレベルの生活の様子を取り上げたことによって実現できている（Eby 2015: 16-18）。

2-3. 「アリコとアンバイ」が提起するパプアニューギニアの女性たちが抱える課題

Rooney（2019）は、「アリコとアンバイ」で描かれている物語を、「被害女性を救済するステレオタイプの物語ではなく、現代パプアニューギニアの課題を、よいことも悪いことも美しさも醜さも、すべてを繊細に描いている」と評価している。二人の経験する出来事と葛藤は、まさに現在

の女性たちがジェンダーによる差別や格差によって直面している問題であると読み解ける。それらは、パプアニューギニア社会に存在する「差異」に着眼すると、以下のように分類できる。

第一に、都市部と農村部の格差という社会構造である。アリコは、農村部出身であるために部族紛争に家族が巻き込まれ、また学校に通うことが困難になった。教育へのアクセスに対する制限などの機会の不平等が、農村部と都市部に存在し、また多民族国家という社会構造によって女の子たちに影響が及ぼされるという状況が描かれている。

第二に、基礎教育現場における、女の子に対する制限や差別がある。Wilson (2019) が行った、2つの初等教育学校で調査によると、31%の女の子が「学校は安全ではない」と回答している(男子は0%だった)。実際に映画の中でも二人とも学校を一度中退していることから、学校中退が簡単に起こりうるということがわかる。また通学事情も悪く、貧困や治安によって決して安全とは言えない環境であり、学校という場所が女の子たちにとって自由と安全を保障された場所ではない。

第三に、家庭内におけるジェンダー役割と差別である。前述した教育へのアクセスにも関係するが、パプアニューギニアは家父長制の残る男性優位な社会であるため、女性が性暴力やジェンダーによる差別の犠牲になりやすい。アンバイが義父にレイプされたり、アリコが強制結婚させられた夫から暴力を受けそうになったり、女性側が家庭内において劣勢に立ちやすく、このことがまた、女子の教育を受ける権利の阻害要因になっていることが描かれている。このような非常に繊細な課題については、制作過程においてワークショップ

を実施しながら、現地の人々やスタッフ・俳優陣が、「どのように描くことが適切か」ということを話しあったという。これらのプロセスにより、実際に起きている性暴力の方法・被害状況・関係性が多様であることを考慮し、またトラウマをもつ視聴者がいることを想定し、シーンを厳選しながら制作しているため、より現代の状況に近い様子が描けている (Eby 2015: 18)。

3. 日本国内における『アリコとアンバイ』に対する反応

本作に対し、日本ではどのような反応があったのか。本作は、2018年に東京および名古屋にて合計4回、日本初となる上映会を実施した。上映後、それぞれの会場においてマーク・エビイ監督およびダイアナ・アントン監督とリモート接続をしたうえでQ&Aセッションを実施し、映画製作の舞台裏と描かれているジェンダー問題について、参加者を交えてのディスカッションを行った。また、参加者にはアンケートを実施し、パプアニューギニアの現状や映画の内容についての感想や意見を集めた。上映会およびトークセッションに関しての総合的な評価は、図3のとおりである(来場者アンケートより)。

上映後の来場者アンケートから、本作に対する日本国内の反応として、総じて多かったのが「パプアニューギニアという国家自体や、現状を初めて知った」というものだった。日本国内における、太平洋島嶼国に関する知名度や理解度の低さを改めて示す結果であったといえ、本作の音声と映像によって映し出された姿によって、より現実的にパプアニューギニアという国家と社会の様子を伝

上映は満足できるものでしたか（5段階評価・参加者計64名）

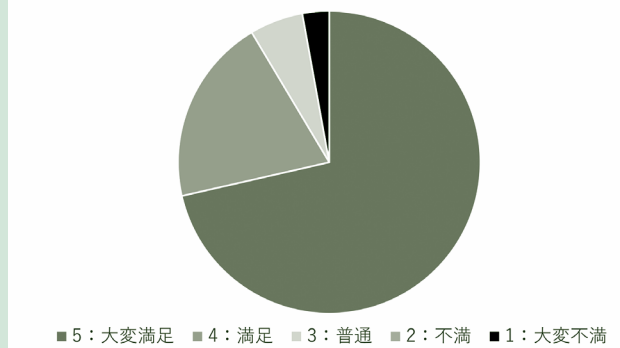


図3：日本上映会に対する総合満足度

えることができた。特に、部族間紛争の様子と伝統的社会の風景（家屋、民族衣装、仮面、武器など）を取り入れていることで、多民族国家であるパプアニューギニアの成り立ちを伝えている。

その他の来場者の反応として、いくつかの傾向が見られた。第一に、パプアニューギニアにおける女子たちを取り巻く環境に対して「衝撃を受けた」というものである。すなわち、パプアニューギニア社会に根強く残るジェンダー差別と性暴力の実態の重大性に対する気付きを示す内容のものであった。

「あまりにも不条理である」

「Shocking but moving story」

「現実にごういうことが起きている国があるのだという衝撃と、自分が今いる状況がいかに有難いものかを再認識させられました」

「力でものを言わせる男性に対して、女性がどう対応できるというのか？」

「アリコもアンバイも、最後は幸せに暮らせることができてよかったけど、2人とも経済力・理解力のある有力者に会えたことで機会を見つけ

ることができた。困難にある人が自立して機会をつかめるようになることは、難しいのかな？」

（以上、来場者アンケートより抜粋）

これらの意見からは、ジェンダーによる差別や性暴力が、どのような形で女子たちの人生に影響を及ぼしているのかについて、日本社会からは想像もできない形で表れているということも読み取れる。さらに、パプアニューギニアという社会構造の複雑性と歴史も影響を及ぼしていることがわかる。

第二に、前述したように「パプアニューギニアの現状への驚き」が示された一方、本作内で描かれている差別や性暴力被害などのジェンダー問題については、「パプアニューギニアだけの問題ではない」という、日本との共通性を指摘する回答であった。

「女性への暴力は、パプアニューギニアだけの問題ではなく、日本でも少し前までそういう状況はあったのではないか」

「パプアニューギニアという遠い地の物語です

が、少し昔の日本にもあったような内容でした。現代も、根本は変わっていない気がします」

「幼いころの自分と大人の男性との関係を思い出しました。親としての気持ち、社会はどうあるべきか、教育の役割、いろいろな思いを馳せるきっかけとなった」

(以上、来場者アンケートより抜粋)

このように、本作のストーリーラインによって、パプアニューギニアでの出来事を、自らの体験や日本社会における問題へ置き換えるという点である。ここから、ジェンダーによる差別が、社会的・文化的背景が異なったとしても共通に表れうることへの指摘が読み取れ、さらには日本社会にいまに残る女性の社会的地位の低さや、女性の社会進出の困難さが残っていることを感じられることがわかる。

4. 考察：「アリコとアンバイ」は日本人のカタルシスとなりえたか

映画「アリコとアンバイ」の物語は、文化的・社会的・歴史的な文脈の異なる日本においてもまた、共感を生んだ。日本国内での反応から、「アリコとアンバイ」が導き出している、ジェンダー問題の固有性と共通性と、それらがどのような点で日本人視聴者にとってのカタルシスとなりえたか、という点について以下、考察していく。

4- 1. 伝統的家族構造がもたらすジェンダー役割への影響

ジェンダー問題の固有性と共通性として映し出されたものに、家族内でのジェンダー間の役割が

ある。パプアニューギニアは、家父長制が残る社会であり、実際に男性の家族内での役割と優位性は、二人が直面する困難でもあった。アリコは、学業を続けていくことが難しくなった時、自身の出身部族が別の部族との間で行っていた平和交渉の条件として、別の部族の有力者である年配の男性の4番目の妻として強制的に結婚させられる。その家では、アリコの夫である男性が一族の中で絶大な権力を持ち、妻と子供たちを従わせている。またアンバイは、前述したように、義父の暴力とレイプに苦しんでいるが、彼女の母もまた、夫からの暴力に苦しみ、精神的にもコントロールされている。このような様子は、「家制度」による家庭内での男性優位の概念が残る日本にも共通する点でもある。すなわち、日本の家制度は、江戸時代の家父長制を基に発展してきた制度であり、伝統的な家族構造とジェンダー役割についての基本的な概念は両国で共通している。そのため、これらの現状に果敢に立ち向かっていく二人のヒロインの姿が共感を生んだのではないか。ただしパプアニューギニアの家父長制については、「家父長制があるからこそ、女性の価値が高まっている」という指摘もなされている。Spark & Meki (2013)によれば、「母としての女性の価値は家族という枠組みを超えてパプアニューギニア社会で活かされる」と指摘している。すなわち、家事や育児などのマルチタスクを日々こなす「母である女性」の力は、経済活動や政治の場に幅広く必要となり、男性よりもポテンシャルが高いということである。これは、2017年総選挙で女性議員が1人もいなくなったことなど、女性の政治参加の低さに課題を持つパプアニューギニアで近年期待されているクォータ制の導入に対する議論⁽¹⁾にもつ

ながら、ひいては同様の課題をもつ日本にも示唆を与える点ではないだろうか。⁽²⁾

4- 2.「解決策は奇跡」であるという結末へのアンチテーゼ

「アリコとアンバイ」の物語は、ハッピーエンドで締めくくられる。アリコは、強制結婚させられた夫のもとから逃げ出し、元々通学していた街の学校の教師からのサポートを得ることができ、学校に復学、無事に学位を取得する。アンバイは、実父が、実は有力な政治家であることを突き止め、実父に再会することで豊かで安定した生活を手に入れる。一方、アンバイに暴力をふるっていた義父は、通報されて逮捕される。最終的に、二人はエイサンや友人たちと仲良く楽しく過ごすようになるハッピーエンドであるが、この結末それ自身が、ハッピーエンドに対するアンチテーゼでもある。つまり、二人が幸せな生活を手に入れたのは、教師のサポートや有力者の父の発見など、「奇跡」が起こったためであり、すべてのジェンダーによる差別や性暴力に苦しむ女の子たちに当てはまることではない。それはつまり、パプアニューギニア社会にはびこるジェンダー問題に根本的な解決策がないことを示しているのである。しかしながら、Wilson (2019) が指摘しているように、このような男性優位社会において女子の権利を守るためには基礎教育が重要であるなど、根本的なジェンダー問題に対する解決策が模索されている。しかしながら、このジェンダー平等の達成と、ジェンダーに基づく差別や課題としての解決の困難性は世界的な課題であり、「解決策がない」という事実がもたらす絶望感には、共感性を生む点があったといえる。

4- 3.「困難に立ち向かう」女性たちの姿とジェンダー役割

最後に、アリコとアンバイは、二人ともジェンダーによる差別や課題に対して果敢に挑み、現状を変化させるために行動している。また、Rooney (2019) が指摘しているように、「アリコとアンバイ」は、男性と女性の二項対立を呼び込むように表現されていない。すなわち、登場人物のすべての男性が「悪者」ではなく、二人を支える大切な友人であるエイサンをはじめ、アリコの叔父やアンバイの実父は、女子である二人や周囲の女性たちを尊重し、サポートする存在として描かれている。これらの点から、本作品は、単純にジェンダー役割における善悪を示すものではなく、「平等」な社会の実現に向けたポジティブな変化に対しての行動に示唆を与えうるアプローチをとっている。このような、伝統的・文化的なジェンダー役割の変化に対して声を上げ始めるという動きは、「#MeToo」「#KuToo」やフラワーデモなど、近年の日本社会でも見られる現象であり、共感を生みやすい。

以上の観点から、ジェンダーの役割や関連する諸課題、さらにそれを現代の人々がどのように捉えているかについて、パプアニューギニアと日本でも共通性がみられ、両国家におけるジェンダーに対する考え方が、伝統的なものから多様性や平等の尊重に向けた移行期にあるということを示している。

5. おわりに

「アリコとアンバイ」は、最終的に奇跡が起きることによって、現状の課題から救済され、幸せな生活を手に入れる。ジェンダー問題は、奇跡でも起こらない限り、解決は不可能なのだろうか。

このような結末にした背景について、エビィ監督及びアントン監督は、「たくさんの障害を乗り越えた先に、必ず幸せが待っているという希望、若い女性になら達成可能であるというポジティブなメッセージを伝えたかった」と話している。⁽³⁾ その上で、「様々なことを乗り越えるための支援の重要性を示したかった」とし、奇跡を起こすためのサポートの必要性を示すことも狙いであるという。

「アリコとアンバイ」が伝え、提起している課題は、世界的課題として認識が深まる「ジェンダー平等と女性のエンパワーメント（SDGs Goal 5）」の達成に向けて、どのような政策とアプローチが必要になるのかを考えるうえでの本質的課題を伝えている。パプアニューギニアは、太平洋島嶼地域最大の国家であり、ODA（政府開発援助）を通じて日本とも貿易上・外交上関係が深い。このような事実を踏まえ、どのような「サポート」が不可欠であるのか、その援助効果も含めて日本が果たすべき役割と2国間の関係性について、考察していくことが今後の課題である。

また、「アリコとアンバイ」のユニークな制作過程は、そのプロセス自体が現地の人々の「サポート」になっており、地元のリソースで実現可能なものの中で、それらを活かし、またワークショップを通じてキャパシティ・ビルディングも行っており、現地のメディア製作能力の持続可能性向上

にも貢献している。国内外に「現状を伝える」手段・能力が地元のリソースによって持続することは、パプアニューギニアの女性の地位向上および救済にも間接的に寄与しうる。加えて、このような形態をとったことで、より現実に即したストーリー設計や撮影が成功した、好循環を生み出したプロジェクトであるといえるであろう。

本研究の限界として、題材としている「アリコとアンバイ」には日本語字幕がなく、今回対象とした上映会は、英語字幕（言語はピジン語）のものを使用した。この点から、日本語表現になった際にどのような反応が得られるのかについてや、その差については考察できていない。パプアニューギニアの現代的なジェンダー課題についての理解促進のためにも、本作品の日本語字幕版が将来的に制作され、普及していくことを願う。

注

- (1) パプアニューギニアにおけるクォータ制導入に関する議論については、Epa (2018)などを参照。
- (2) The World Economic Forum (2018)によれば、日本のPolitical Empowermentは149か国中125位、パプアニューギニアはIndexの対象国に入っていない。
- (3) 2018年10月26日実施の上映会後のマーク・エビィ監督およびダイアナ・アントン監督へのインタビューに基づく。

参考文献

1. Directed by Eby, M and Anton, D., *Aliko and Ambai*. 2017.
2. Rooney, M. N. (2019) . Media Review: Aliko and Ambai. *The Journal of Pacific History*, 1-2.
3. Fulu, E., Warner, X., Miedema, S., Jewkes, R., Roselli, T. and Lang, J. (2013) . *Why Do Some*

Men Use Violence Against Women and How Can We Prevent It? Quantitative Findings from the United Nations Multi-country Study on Men and Violence in Asia and the Pacific. Bangkok: UNDP, UNFPA, UN Women and UNV.

4. UNDP (2018) . *Human Development Report 2018*, United Nations Development Program.
5. UNDP, Goal 5: Gender equality: UNDP in Papua New Guinea. (n.d.) . Retrieved November 23, 2019, from https://www.pg.undp.org/content/papua_new_guinea/en/home/sustainable-development-goals/goal-5-gender-equality.html.
6. UN Women, In the words of Joanna Oala: "It's better to speak up and let your voice be heard". (2018, November 27) . Retrieved November 23, 2019, from <https://www.unwomen.org/en/news/stories/2018/11/in-the-words-of-joanna-oala>.
7. UNOCHA, Country Profile: Papua New Guinea. (2019, March 1) . Retrieved November 23, 2019, from <https://www.unocha.org/asia-and-pacific-roap/papua-new-guinea>.
8. Eby, M. (2015) . *Love and Violence: Melanesian Youth produce a film for regional distribution*. Papua New Guinea : Center for Social and Creative Media at the University of Goroka.
9. Wilson, P. (October 2, 2019) . Gender based violence and basic education in PNG. Retrieved November 23, 2019, from <https://devpolicy.org/gender-based-violence-and-basic-education-in-png-20191002/>.
10. Spark, C., & Meki, T. (2013) . Reaching into the Bilum: Motherhood as a Source of Women's Power in Papua New Guinea. *IN BRIEF, Australian National University, Department of Pacific Affairs*, 15.
11. Epa, A. (2018, March 5) . Papua New Guinea's Parliament Has No Women. Retrieved November 23, 2019, from <https://www.globalcitizen.org/en/content/papua-new-guineas-parliament-has-no-women/>.
12. The World Economic Forum (2018) . *The Global Gender Gap Report 2018*. Cologny/Geneva: World Economic Forum.
13. Eby, M. (2015, March 3) . Aliko & Ambai Film Project: Engaging with Communities -

Mobilising Media for Sustainable Outcomes in the Pacific Region. Retrieved November 23, 2019, from <https://sites.google.com/site/mobilisingmediainthepacific/research-from-the-field/alikoambai/filmprojectengagingwithcommunities>.

14. Eby, M., & Anton, D. (2017) . *Aliko and Ambai Press Kit*. Papua New Guinea : Center for Social and Creative Media at the University of Goroka.

付記

本研究は、2018年度名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ（GRL）ジェンダー研究集会開催助成金による助成を受けて開催したセミナー「映画「Aliko and Ambai」から考える伝統的社会とジェンダー」の実施内容に基づく。